昭和天皇と軍事情報-大本営による戦況把握と戦況上奏-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学史学地理学会 公開日: 2009-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 朗 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1566

駿台史学　第一二七号　一―二一頁、二〇〇六年三月
SUNDAI SHIGAKU (Sundai Historical Review)
No. 127, March 2006. pp. 1-21.

昭和天皇と軍事情報

――大本営による戦況把握と戦況上奏――

山田朗

要旨　一九四四年一〇月の台湾沖航空戦・フィリピン沖海戦を事例として大本営による戦況把握と天皇への戦況上奏について検討すると次のことが分かる。

大本営の戦果判定の方法は、統計にもとづく戦果推定よりも、第一線部隊からの矛盾に満ちた、あまりに過大な報告を適宜セレクトするというやり方がとられていた。そのため、天皇に上奏された戦果は、客観的には誤った過大なものであったが、大本営が認定した、すくなくともそう信じた戦果であった。

一方、日本軍みずからの損害についての天皇への報告は、かなり正確だったといえる。たとえば、一九四四年一〇月下旬、フィリピン沖海戦で日本海軍は大敗し、戦艦武蔵など二八隻の水上艦艇を失ったが、戦況上奏において一〇月二三日から二八日のあいだに、部隊名あるいは艦名をあげて二〇隻の沈没と六隻の落伍・動静不明が天皇に報告されている。実際に沈没したが、天皇に報告されなかったのは駆逐艦二隻のみである。損害の速報としては、正確なものだったといってよい。また、特攻隊についても、戦後も一般には知られていない、戦果があがっていない段階から特攻の実施が報告されていた。

キーワード：昭和天皇　軍事情報　戦況上奏　台湾沖航空戦　フィリピン沖海戦

はじめに――本稿の目的――

本稿の目的は、アジア太平洋戦争末期における日本軍中央（大本営）の情報収集能力と分析能力を検討することによって、昭和天皇が得ていた軍事情報の質を明らかにすることにある。検討の対象とする時期は、一九四四年一〇月から一一月にかけてである。この時期を選んだのは、第一は、この時期には台湾沖航空戦・フィリピン沖海戦という大規模な戦闘がおこなわれ、日本軍が特攻作戦を始めるなど戦況が激

変したことにより、実際の戦果・損害と天皇が得ていた軍事情報との比較検討がやりやすいため、第二に、大本営海軍部が作成した戦況上奏書（防衛庁防衛研究所図書館所蔵）が、この時期に限ってほとんど欠落なく残存しているためである。

天皇にどのような軍事情報が提供されていたかを知る史料としては、防衛庁防衛研究所図書館に所蔵されている大本営海軍部『奏上書綴』（一九四四年一〇月～四五年一月、同六月～八月）、参謀本部第二課〔作戦課〕『上奏関係文書綴』（一九四一年～四四年）全九巻一一冊などがある。前者は、おもに大本営海軍部すなわち軍令部が天皇に奏上・提出した戦況報告書を月ごとにファイルしたものであり、天皇が得ていた戦況報告の量・質を知る上で貴重なものである。後者は、大本営から発令される陸軍の最高命令としての〈大陸命〉、「御説明」、作戦方針に関する上奏書などの下書きを作成順に並べたものであり、天皇の戦争指導と大本営命令発令にいたるプロセスを検討する上で重要なものである。このうち、本稿で分析対象とする大本営海軍部『奏上書綴』には、ひと月あたりだいたい四〇件くらいの奏上書（分量は四五〇頁から五〇〇頁弱）が綴じられて、その大部分を占めるのが、「戦況ニ関シ奏上」（以下「奏上」）あるいは「戦況ニ関シ御説明資料」（以下「御説明資料」）という書類である。この二種類の書類は、ともに天皇にたいする戦況報告書である。これらの戦況報告書は、一日にどちらかが最低一回は提出されており、戦況活発な場合は、一日に二度・三度と天皇のもとに届けられた。残存している記録の中では、一九四四年一〇月一四日に「奏上」が一回、「御説明資料」が二回、合計三回の戦況報告が行われているのが最高である。一〇月には、一三日・一五日・二八日に二回の報告がされている。これは、台湾沖航空戦、フィリピン沖海戦といった大規模な作戦が連続して実施されきわめて戦況が活発であったため、天皇への報告もきめ細かく行われたからである。

二種類の戦況上奏は、ともに書類として天皇に提出されたが、両者の違いは、「奏上」は軍令部総長が直接天皇に拝謁して上奏するもの、「御説明資料」は侍従武官が天皇の前で読み上げるものである。「奏上」による報告は「戦況上奏」あるいは「戦況奏上」と呼称されたが、「御説明資料」にもとづく報告は「戦況上聞」という言い方で区別されていた。文体にも違いがあり、「奏上」は「～デ御座イマス」といったやや口語調のデス・マス体に近い文体であるが、「御説明資料」は文語調の文体である。ただし、二種類の上奏の質的な差異はなく、「奏上」が詳しくて「御説明資料」が簡略というわけでもなく、天皇は、これらの毎日の戦況上奏によって前日から当日の戦況について知ることができた。

戦況上奏の書類には、日によって詳細な場合と簡略な場合があるが、その構成は、地域別の作戦の進捗状況、戦果と損害、輸送船（日本商船）の損害、敵空襲状況一覧（毎日ではない）などがまとめられており、関連地図が添付されていたようである（現存するファイルには地図はないが、上奏書類にはしばしば「～ハ別図ノ通リ」といった表現

がある)。このうち、たとえば、輸送船の喪失状況については、どのような名前の船(所属――陸軍徴用船＝記号A、海軍徴用船＝記号B、民需用＝記号C――、トン数、積み荷の種類・量)が、いつ、どこで、何の原因で(潜水艦か空襲か機雷か)沈んだのか、具体的に報告されている。また、敵の空襲状況については、方面・場所・日時、敵兵力(機種・機数)、戦果(撃墜・撃破数)、記事(損害など)が一覧表として示されている。たとえば、一九四四年一〇月一五日の「御説明資料」ではこれらについては以下の通り記されている。

七、各地空襲状況　別表ノ通

八、船舶被害

南嶺丸(A二四〇七屯糧秣二〇〇〇立方米)ハ昨日〇八三〇「マニラ」ノ南々東一五〇浬ニ於テ日鉄丸(B油五九九三屯)ハ昨日〇二〇〇「ボルネオ」北西岸ニ於テ何レモ敵潜水艦ノ雷撃ヲ受ケ沈没セリ

駆逐艦冬月ハ去ル十二日一九三五頃御前埼ノ南方四〇浬ニ於テ敵潜水艦ノ雷撃ヲ受ケ揚錨機ヨリ前方切断セルモ航行ニ差支エナキ事判明セリ

別表

方面　場所　日時　兵力　戦果　記事

《中部太平洋方面》[中略]

《北方方面》[中略]

《南東方面》[中略]

《南西方面》

「ダバオ」　一四日〇〇一〇　f大　一　投弾

〇九〇五　P三八　三　偵察

「ザンボアンガ」　一四日〇〇三八　B二四　一　投弾

「ポマラ」　一四日一〇四一　f大　六　製錬所ニ被害アリ

トラック一破損

死傷数名

宣伝文散布

「バリックパパン」　一四日〇〇一〇　f大　六　投弾　被害軽微

〜〇三〇〇　戦果被害ナシ

「アンボン」　一三日〇七四九　B二五　二　旋回　一部銃撃

f小　一一　〃

P三八　四　〃

PBY　一　〃

一一四五　P三八　一三　銃爆撃

B二五　三　戦死傷一一

宿舎一全焼

「カイマナ」

一三日一九〇九　P四〇　一二　投弾
「コカス」一三日一四一四　f小　八　銃撃
一四日〇九三五　f中　四
「カウ」周辺
一四日〇六一五　B二四　一　偵察通過
〇九一五　P三八　四　銃爆撃
炎上二ヶ所
「メナド」周辺
一四日〇七三〇　f大　一　投弾
～一一〇〇
〇九〇五　P三八　六　〃
「ケイ」　八日　〇八三五　f小　四　偵察
一二五三　f中　一　銃撃
f小　二　〃[1]

別表にある「B二五」「P四〇」「B二四」等は機種名であり、機種が不明な場合は、来襲したf（航空機）の大・中・小で区分し、その機数が記してある。一九四四年一〇月中旬、まさに台湾沖航空戦が展開されているこの段階で、フィリピン・インドネシア方面がすでに米軍の激しい航空攻撃にさらされており、「戦果」の欄があるにもかかわらず、日本軍がほとんどみるべき戦果をあげていないことがわかる。

ところで、天皇が量的には相当大量の軍事情報を提供されていたことは、藤原彰『昭和天皇の十五年戦争』や拙著『大元帥・昭和天皇』『昭和天皇の軍事思想と戦略』などでも指摘されてきたことであるが[2]、重要なのは、日本軍大本営の情報収集能力と分析能力、そしてそれにもとづく戦況上奏の質、すなわち戦果・損害の正確さである。もし、毎日、天皇に戦況の上奏が行われていても、その内容が不正確であったり、あるいは作為に満ちた虚構ばかりが報告されていれば、天皇は戦争の実状を知らされていなかったということになるからである。本稿の内容は、拙著『大元帥・昭和天皇』『昭和天皇の軍事思想と戦略』と重複する部分もあるが、拙著刊行後に公開された史料をも含めて分析し、大本営の情報収集・分析能力と戦況上奏の質についてさらに検討を深めたい。

Ⅰ　台湾沖航空戦における幻の「大戦果」の上奏

今日では、台湾沖航空戦の発端となった沖縄に対する「十・十空襲」は有名であるが、台湾沖航空戦そのものはほとんど知られていない[3]。当時は、新聞で「真珠湾以来の空前の大戦果」と宣伝され、この戦闘を素材にして映画「雷撃隊出動」や戦時歌謡「台湾沖凱歌」までが作られたにもかかわらず、今日では、一般の年表にも載っていない戦闘である。また、もし語られることがあったとしても、架空の大戦果を宣伝した「大本営発表」の典型的事例として紹介されるに過ぎない。確かに、台湾沖航空戦とは、実態のない「大戦果」に日本側だけが熱狂した幻の航空戦であった。

台湾沖航空戦は一九四四年一〇月一二日から一五日かけて台湾・沖

縄周辺海域で行われた航空戦で、空母一七隻を基幹とする米機動部隊の艦載機が、一〇日より沖縄・台湾方面に激しい空襲を加えたのに対し、日本側は九州・沖縄・台湾に航空兵力を結集して反撃した。一〇月一六日、大本営は、この日本側の反撃によってアメリカ側に轟撃沈一七隻（うち空母一一隻）、撃破二三隻（うち空母六隻）の大損害をあたえたと発表したが、実際の米側の損害は、沈没なし、損傷六隻（うち空母二隻）にすぎなかった。大本営では、海軍による「大戦果」の発表によって、陸軍も、この航空戦に大勝利をおさめたものと誤認し、その後の作戦計画をルソン決戦方針からレイテ決戦方針へと変更するという、その後の日本軍の戦略・作戦に大きな影響を与えた戦闘であった。

台湾沖航空戦の発端となったのは、一九四四年一〇月一〇日、米第三艦隊第三八タスクフォースによる南西諸島への大規模な空襲である。日本側は、事前に米機動部隊の規模・編制については九月段階の情報を集約してほぼ正確なところを把握していたが、肝心のその動静（所在）についてはつかみ損ねており、この空襲は完全な奇襲攻撃となった。大本営海軍部第三部（情報部）では、同年八月に、米艦隊のフィリピン来攻は一二月中旬と判断していたため[4]、米機動部隊の予想外の早い行動を察知することさえできなかった。天皇に対する戦況上奏においても、一〇月一一日以降は、日々刻々索敵機から入電する米機動部隊の位置・兵力を克明に天皇に伝えていることが分かるが、一〇日以前には、米機動部隊の動静についてはまったく触れられていない[5]。

一〇月一一日、大本営海軍部第三部は大野竹二部長の名で各艦隊司令長官あてに次のような電報を送っている。この電報から大本営が、西太平洋で作戦行動中の米機動部隊の全容をほぼ把握していたことがわかる。

一　現在迄ノ調査ニ依ルニ、九月「パラオ」菲島（＝フィリピン）方面ニ来襲セル機動部隊ハ第三艦隊第三八特別任務部隊ニシテ空母正規八、巡洋艦改八、戦艦八乃至一〇、巡洋艦一四乃至一八、駆逐艦六〇

二　正規二、巡洋艦改二ヲ中心トスル四群ヲ以テ編成シ　司令長官「ミッチャー中将」三番隊ノ「レキシントン」ニ在リ　其ノ概観「マリアナ」作戦当時ノ第五八部隊ト相似ニシテ正規母艦一増強

三　母艦ハ敵ノ全力ト認メラル　「サイパン」来襲ノ際ト同様随時決戦ノ構ヲ持シアリシモノト判断セラル

四　特別任務部隊ノ番号ハ所属艦隊（第三、第五）ニ応ジ　三八、五八ト呼称スルモノノ如シ

五　右部隊ノ背後ニ護衛空母二乃至三隻ヲ配シ人員及飛行機ノ海上補充ヲ行ヒ一隻毎ニ各種搭乗員約七〇組ヲ準備スト謂フ[6]

大本営海軍部は、米機動部隊が、「正規二、巡洋艦改二ヲ中心トスル四群ヲ以テ編成」されている空母一六隻よりなる大部隊であること、同じ機動部隊（特別任務部隊＝タスクフォース）が、第三艦隊に所属する場合には「第三八特別任務部隊」、第五艦隊に所属する場合には

「第五八特別任務部隊」と呼称することなどをつかんでいる。「正規」とはエセックス級航空母艦、「巡洋艦改」とはインディペンデンス級軽空母のことである。これらは、米軍パイロットの捕虜の尋問などから得られた情報をもとに分析されたもので、ほぼ実際の米機動部隊（第三八タスクフォース）の勢力を伝えている。モリソン『第二次世界大戦・アメリカ海軍作戦史』第一二巻によれば、実際の一九四四年一〇月一四日時点における第三八タスクフォースは、たしかに四群からなり、航空母艦一七隻（正規大型空母九隻・インディペンデンス級軽空母八隻）、戦艦六隻、巡洋艦一四隻、駆逐艦五八隻という陣容であった。(7) 実際の米機動部隊が、航空母艦一七隻・戦艦六隻であるのに対し、日本側は航空母艦一六隻・戦艦八～一〇隻とつかんでいる。航空偵察が十分にできない、劣勢の日本側としては、むしろよくその戦力の実態をつかんでいたといえよう。しかし、米機動部隊の戦力の予想は的確であったが、それがどこにいるかという最も肝心なことを日本海軍はつかんでいなかった。これは、マリアナを喪失するなど戦線が後退しつつあり、すでにフィリピンへの空襲もしばしばで、中部太平洋方面への航空索敵も十分にできなかったためである。

沖縄方面への大規模な空襲が始まった翌日の一〇月一一日の戦況上奏では、米機動部隊に対し、次のように報告されている。

昨日竝ニ本日ノ索敵状況ハ別図［欠］ノ通デ御座イマシテ鹿屋ヲ出発致シマシタ索敵機ハ昨十日午後三時四〇分頃那覇ノ東方一〇〇浬附近ニ空母三隻ヲ基幹トスル一群、同ジク東南東一四〇浬附近ニ空母二隻巡洋艦駆逐艦約一〇隻ヨリ成リマスル一群ノ敵機動部隊ヲ発見致シテ居リマス

此ノ敵ニ対シマシテT攻撃部隊ニ於キマシテハ中攻五機飛行艇四機ヲ以テ捕捉接触ヲ企テマシタガ本朝一時ニ至ルモ敵情ヲ得ズ夜間攻撃ヲ断念致シテ居リマス

尚昨日午後九時過ギ九〇一空ノ飛行艇ハ鷲鑾鼻［台湾の南端］ノ六五度一四〇浬ニ於キマシテ敵ラシキ艦船ヲ、本朝三時頃八〇一空ノ飛行艇ハ那覇ノ南々東三八〇浬ニ南下中ノ敵ラシキ艦隊ヲ、夫々電探ニテ探知捕捉致シ更ニ本日午前十一時過ギ新竹ヲ出発セル哨戒機ハ鷲鑾鼻ノ一一五度四八〇浬ニ於キマシテ空母三隻戦艦三隻巡洋艦数隻ヨリ成リマスル敵艦隊ヲ発見致シテ居リマス(8)

一方的な攻撃にさらされほとんど反撃もできないながらも、一〇日午後から一一日午前にかけて、日本側は航空索敵によってアメリカの空母のべ八隻を確認している。そして、一二日の戦況上奏の段階で、来襲したこの部隊が、米機動部隊の主力であると判定し、天皇に報告している。

戦況ニ関シ　奏上

謹ミテ戦況ニ関シ　奏上致シマス

一、一昨日南西諸島方面ニ来襲致シマシタ敵機動部隊ハ同日夕刻ヨリ南下避退致シマシタ模様デ御座イマシテ昨日其ノ一群ト推定致シマスモノガ午後二時過ギ「ルソン」島北西端「エンガノ」「アパリ」方面ニ数十機来襲致シマシタガ被害ハ殆ド無カッタ様

デ御座イマシテ右以外敵機動部隊ノ来襲ハ御座イマセヌ　其ノ後判明致シマシタモノヲ綜合致シマスルニ同方面ニ於キマスル船舶被害ハ別表ノ通デ御座イマス

昨日並ニ本日ノ索敵状況ハ別図〔欠〕ノ通デ御座イマシテ新竹ヨリ出発致シマシタ索敵機ハ昨十一日午前十一時五分及午後一時五十分ノ二回ニ亘リマシテ台湾鵞鑾鼻ノ一一五度四八〇浬附近ニ空母三隻ヲ基幹トスル一群及其ノ北西方約六〇浬ニ兵力不詳ナル他ノ一群ノ機動部隊ヲ発見致シテ居リマス

次イデ昨日午後七時東港ヲ発進致シマシテ夜間索敵ニ向ヒマシタ飛行艇三機ハ夫々南東方九〇浬乃至三〇〇浬ノ間ニ数回ニ亘リマシテ敵機動部隊ヲ探知概ネ毎回トモ敵夜間戦闘機ノ妨害ヲ受ケ之ト交戦致シテ居リマス　其ノ中ノ一機ハ本朝午前二時四〇分鵞鑾鼻ノ一三五度約一八〇浬ニ空母数隻ヲ含ム機動部隊ヲ発見致シテ居リマス

右ノ状況ヨリ判断致シマシテ同方面ニ行動中ノ敵機動部隊ハ四群程度デ敵機動部隊ノ主力ト判断致シマス〔中略〕

〔別表〕

沈没

艦艇　迅鯨、五十八号駆潜艇、海威、一五八号輸送艦、魚雷艇十三隻、甲標的二隻、立神、新浦丸（掃海特務艇　二九四屯）

商船　宝莱丸（C　三二〇〇屯）、福浦丸（A　三二〇〇屯）、大海丸（C　二五〇〇屯）、広田丸（A　二五〇〇屯）（於宮古島）機帆船・漁船　雄基丸以下多数

大破　江竜丸（C　二二〇〇屯）

第一拓南丸（B　三四三噸）（於南大東島）[9]

ここでは、一〇月一〇日に沖縄本島をはじめとする南西諸島全域を空襲した米機動部隊が、一二日現在、まだ台湾近海を航行中であり、「敵機動部隊ハ四群程度デ敵機動部隊ノ主力ト判断致シマス」としている。大本営は、来襲した米機動部隊の全容をほぼ正確にとらえ、かつ、それを天皇に報告している。また、この上奏から、一〇月一〇日の空襲で、艦艇二一隻・商船四隻だけでなく機帆船・漁船が多数が沈没したことまでが天皇に報告されているがわかる。

米機動部隊に対する日本軍の反撃は立ち遅れ、ようやく一二日夜になって反撃の準備が整いつつあった。一三日の天皇への上奏にもそのことは出てくる。

昨日〔一〇月一二日〕夜半ニ於キマシテモ索敵機ハ台湾東方石垣島南方海面ニ四群ノ敵機動部隊ヲ捕捉致シテ居リマシテ基地航空部隊ハ引続キ全力ヲ以テ九州、沖縄、台湾、比島方面ヨリ此ノ敵ヲ攻撃撃滅スベク準備中デ御座イマス[10]

そして、同じ上奏の中で、初めて「戦果」が報告されている。

本日〔一〇月一三日〕一時迄ニ判明致シマシタ略確実ナル戦果ハ撃沈二隻中破二隻デ御座イマシテ何レモ艦種ハ明デハアリマセヌガ撃沈中破各一隻ハ空母ノ算ガ大デ御座イマス　尚沖縄ヲ出発致シマシタ艦攻二三機陸軍重爆二二機ハ昨夜々半夜間攻撃ヲ決行致

シマシタ筈デ御座イマスルガ未ダ戦果ハ判明致シテ居リマセヌ[11]

この天皇への戦況上奏で判断する限り、この段階での「戦果」はきわめて曖昧なもので、艦種が明らかでなく、撃沈も「略確実」で、そのうち一隻が「空母ノ算ガ大」ということにとどまっている。つまり、確たるものが何もないといってもよいし、昨夜の航空攻撃も「決行致シマシタ筈」という頼りない状態である。これは、大本営はさらに詳細な情報を握っていて、天皇には部分的な情報しか提供していないということではなく、大本営そのものが漠然とした情報しか得ていないことを示している。もし、天皇に作為的な脚色した情報を流そうとしているのならば、もう少し体裁をととのえた言い方をしたに違いない。ところが、後述するように、この後、「戦果」は急速に拡大する。日本側の反撃は一五日まで断続的に続き、一六日の上奏ではこれまでの総合戦果として

撃沈

空母一〇隻（空母六～内一略確実、空母の算大四）・戦艦二隻・巡洋艦三隻・駆逐艦または軽巡洋艦一隻・艦種不詳一隻

火災炎上（撃破）

空母六隻・戦艦一隻・巡洋艦五隻・艦種不詳一一隻[12]

という膨大な戦果が報告された。つまり、撃沈一七隻・撃破二三隻、とりわけ来襲した米空母一六隻（日本側判断）のうち一〇隻を撃沈、六隻を撃破したということだから、米機動部隊は全滅したのも同然の空前の大勝利である。戦果の上奏があった同じ一六日には、午後三時と午後四時三〇分に大本営発表が行われ、ここでもあわせて、撃沈一七隻（うち空母一一隻・戦艦二隻）、撃破二三隻（うち空母六隻・戦艦三～四隻）と発表された[13]。戦果については、天皇への上奏と国民向けの大本営発表との相違はほとんどない。撃沈・撃破の総数は同じである。ただし、両者を詳細に検討すると上奏では空母は合計一六隻撃沈または撃破したことになっているが、大本営発表では合計一七隻になっている。大本営は米機動部隊の空母は一六隻と判断していたのであるから、国民向けの大本営発表では一隻多いのである。その点、天皇への上奏ではきちんと帳尻をあわせている。

天皇は、一〇月一六日、さっそく木戸内大臣にたいして「台湾沖に於ける大戦果につき勅語を賜るの思召」を明らかにしたが[14]、一八日にフィリピン方面で捷一号作戦（レイテ決戦）が発動されたため、勅語はやや遅れて二一日に、寺内寿一南方軍総司令官・豊田副武聯合艦隊司令長官・安藤利吉第一〇方面軍（旧台湾軍）司令官にたいして下された。

勅語

朕カ陸海軍部隊ハ緊密ナル協同ノ下敵艦隊ヲ邀撃シ奮戦大イニ之ヲ撃破セリ

朕深ク之ヲ嘉尚ス

惟フニ戦局ハ日ニ急迫ヲ加フ

汝等愈協心戮力以テ朕カ信倚ニ副ハムコトヲ期セヨ[15]

勅語をうけた豊田聯合艦隊司令長官は、同日、作戦中の全部隊に次

のような訓示を発して士気を鼓舞した。

捷号作戦勃頭ニ於テ御稜威ノ下緒戦有利ニ展開シ　畏クモ優渥ナル勅語ヲ賜リタルハ本職ノ恐懼感激ニ堪ヘザル所ナリ　今ヤ捷号決戦ノ神機目睫ニ迫リ本職ハ陸軍ト緊密ニ協同指揮下全兵力ヲ挙ゲテ之ニ臨マントス　全将兵ハ茲ニ死所ヲ逸セザルノ覚悟ヲ新ニシ必死奮戦以テ驕敵ヲ殲滅シ皇恩ニ報ズベシ

本職ハ皇国興廃ノ関頭ニ立チ神霊ノ加護ヲ信ジ、将兵一同ノ必死体当リノ勇戦ニ依リ誓ツテ敵ヲ殲滅シテ　聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期ス(16)

訓示の冒頭に「緒戦有利ニ展開シ」とあるように、台湾沖航空戦の「大勝利」は今一押しで米軍の進攻を食い止められるにちがいないという希望的観測を作り出していた。

II　大本営の戦果判定能力

一〇月一五日の段階で、大本営海軍部は、聯合艦隊の報告にもとづき台湾沖航空戦の「大勝利」を確信し、一六日には空母一〇隻撃沈・六隻撃破という戦果を天皇にも上奏した。しかし、米軍側資料によれば一〇月一二日～一五日における米機動部隊の損害は、沈没なし、損傷六隻（空母二隻・重巡一隻・軽巡二隻・駆逐艦一隻）にすぎない。(17)なぜ、大本営による戦果判定と実際の戦果の間に、これほどの大きな開きが生じたのか。天皇に上奏された大戦果は、天皇をあざむくための大本営海軍部（軍令部）による意図的な創作なのか、それとも第一線部隊あるいは聯合艦隊司令部の錯誤なのか。

結論から言えば、台湾沖航空戦の幻の大戦果は、戦闘に参加した現地航空部隊からの報告自体が錯誤に基づく膨大かつ曖昧なものであり、それが大本営においても厳密な戦果判定審査を経ないままに戦果として認定され、天皇に上奏されたのである。

一〇月一二日から一六日にいたる期間における現地航空部隊から大本営にあてた戦果報告電報のうち現在残っている電文だけを集計しても撃沈二一～二五隻（空母一六～二〇隻、うち大型空母八～一〇隻）、撃破二隻（いずれも空母）ということになってしまう。(18)

ただ、第一線部隊からの戦果報告というものは、多くの場合、過大になりがちであることは、大本営でもよく理解していた。ましてや、台湾沖航空戦は、主要な戦闘が薄暮戦か夜戦であり、戦果の確認・判定が難しいことも確かであった。攻撃部隊の搭乗員は、夜間の海面に次々と燃え上がる火柱を手がかりに、敵艦への魚雷の命中と戦果（轟沈・撃沈・撃破）を推測していったが、米機動部隊からの反撃の対空砲火も激しく、同一の火炎（魚雷命中）を複数の航空機が別個に報告するなどの混乱も多々起こったものと思われる。したがって、大本営も現地第一線部隊からの戦果速報を鵜呑みにしようとはしなかった。信頼のおける上級司令部による正式の戦果報告を待ったのである。

現地部隊からの戦果報告は、前述したように一〇月一二・一三日には曖昧なものが多く、大本営も戦況の把握に苦心したようである。だが、一四日午後五時四八分、鹿児島県鹿屋の海軍T部隊（夜戦用航空

隊、Tはタイフーンの頭文字）指揮官・久野修三大佐から

一二日　空母六乃至八隻轟撃沈（内正規航空母艦三～四ヲ含ム）

一三日　空母三乃至五隻轟撃沈（内正規空母二～三ヲ含ム）

其ノ他両日共相当多数艦艇ヲ撃沈破セルモノト認ム[19]

という報告が入電し、およそ七時間後の翌一五日午前〇時五五分、聯合艦隊司令部からT部隊指揮官の報告をそのまま追認する正式報告[20]があったことから、大勝利確実という雰囲気がつくられる。大本営にたいする聯合艦隊司令部の報告には、第一線部隊からの直接報告よりもはるかに権威があったし、それなりの戦果判定の「審査」が加えられているものと思われた。聯合艦隊は、九月二九日より横浜市日吉の慶応大学敷地内の地下壕に司令部を移しており、現地の状況がつかめないという点では、東京霞ヶ関の大本営海軍部＝軍令部とほとんど同じ状態であったが、戦闘指揮所は鹿児島県の鹿屋に置いており、台湾沖航空戦の戦果判定などはそちらで行っていた。したがって、大本営としては、断片的な戦果を伝える第一線部隊からの電報も直接受け取っているが、聯合艦隊の戦果判定を待って、状況を判断しようとしていた。

もともと現地部隊からの電報の内容はほとんど空母や戦艦を「轟沈」「撃沈確実」「撃沈略確実」といったもので、沈没以外の戦果（撃破）報告は、天皇にもそのまま上奏された一〇月一三日午前四時五分入電の戦果第一報「中破二　艦種不詳、内一隻空母ノ算大ナリ」（高雄航空基地発電）や一四日午後二時入電「炎上確認一〇隻（艦種不詳）」（T部隊戦闘概報第二号）など、それほど詳細なものがあるわけではなかった[21]。むしろ、現地部隊や聯合艦隊で戦果報告が集計されるにしたがってますます「撃破」は少なくなり、「轟撃沈」「撃沈確実」にまとめられていく傾向があった。つまり、現地攻撃部隊の速報では「撃破（艦種不詳）」であったものが、聯合艦隊にまとめられた段階では「撃沈（空母乃至戦艦）」といった具合に、戦果が上方修正されていった部分がある。ただでさえ、現地部隊からの「撃沈」報告が過大・膨大であった上に、中間で戦果を集計した聯合艦隊司令部は、それを厳密に審査・判定するどころか、「撃破」を「撃沈」へと「端数切り上げ」を行ってしまったのである。

そのため大本営では、さすがに報告された戦果があまりに過大であると思ったようで、逆に割引を行い曖昧なものは「撃沈」を「撃破」に直している。T部隊指揮官と聯合艦隊司令部の報告では、戦果は合計すると少なくとも空母九～一三隻轟撃沈（そのうち正規空母五～七隻）、その他撃沈・撃破多数ということであったのが、天皇には一〇隻撃沈、六隻撃破と上奏されていたのであるから、大本営海軍部では、主観的には、やや低めに見積もった確実なところの戦果を天皇に報告したつもりでいたようである。むしろ海軍だけでなく、陸軍内にも空母九～一三隻轟撃沈（そのうち正規空母五～七隻）という情報は流れ、「大勝利確実」という空気を作っていた。たとえば、参謀本部の戦争指導班『機密戦争日誌』においても次のように記されている。

十月十五日　日曜

一、本日迄ニ判明セル戦果左ノ如シ
十二日　撃沈　空母［記号］六～八　（内制式三～四）
十三日　〃　空母［記号］三～五　（〃　二～三）
計　〃　空母［記号］九～一三（〃　五～七）
外ニ艦型不詳十数隻撃破、
右戦果ハ昨十四日及本日更ニ攻撃ヲ反復中ニシテ拡大ノ算大ナリ、「ガ」島以来二年目ノ快報ニシテ将ニ世界戦史ニ其ノ類例ヲ見ス、帝国ノ戦争完遂ニ対スル自信ヲ強化セルモノト謂フヘク、誠ニ慶賀ニ堪ヘス[22]

参謀本部戦争指導班が記した数字は、T部隊指揮官と聯合艦隊司令部の報告と全く同じものであり、大本営における戦果の正式判定・天皇への上奏の前に、すでに統帥部内でこの数字が一人歩きしていたことが分かる。

大本営では現地部隊の報告は鵜呑みには出来ないとしつつも、現地部隊からの報告のなかには「数箇所ヨリ火焔ヲ吹キ」とか「撃沈セシ戦艦ハカゴ型『マスト』ナリ」[23]といった大雑把な中にも妙に詳細な部分もあり、大本営はその真偽を確認する術も持たず、また、戦果への希望的観測も相俟って、結果として戦果判定において大きな錯誤をおかすこととなった。天皇への上奏でも、随所にきわめて具体的な誤報がでてくる。大戦果が報告された一〇月一六日の上奏でも、米機動部隊の「敗残」した姿が述べられている。

敵機動部隊ハ十四日午前九時頃ヨリ避退中デ御座居マスガ昨日ノ索敵ニ於キマシテハ午前九時三十分殆ド停止致シマシテ油ヲ流シテ居リマスル空母一隻戦艦二隻及之ノ警戒ニ当ツテ居リマスル駆逐艦十一隻ヨリ成リマスル部隊ヲ高雄ノ九八度二六〇浬ニ発見致シテ居リマス　尚此ノ他各所ニ敵損傷艦ガアルモノト判断サレマスノデ聯合艦隊ニ於キマシテハ此ノ際戦果ノ拡充徹底ヲ期スル為各部隊ニ反覆攻撃ヲ加エル様下令致シテ居リマス[24]

打撃を受けた米機動部隊の「損傷艦」に対する残敵掃討の命令を聯合艦隊が出したことも報告されており、戦勝イメージが色濃く出ている。大本営は虚報を意図的に捏造したというよりも、誤報と希望的観測によって自己欺瞞に陥ったのである。

ところで、実際には存在しなかった多数の空母の撃沈といった架空の戦果が、なぜ、現地部隊から報じられたのか。そもそも台湾沖航空戦の「大戦果」発表のもとになった、現地部隊からの膨大な戦果速報とは何であったのか。現地部隊からの聯合艦隊司令部への戦果報告電報は、大本営でも直接傍受しているので、中間で何者かが戦果を「創作」したわけではない（ただし、前述したように、司令部レベルでの戦果の上方修正はあった）。あくまでも、錯誤・虚報の根本原因は、現地部隊の報告そのものにあるのである。すでに当時、現地（南九州）に出張した大本営陸軍部参謀・堀栄三少佐は、第一線の海軍航空部隊からの報告があいまい、誇大なものであることを隊員からの聞き取り調査で確信し、中央にその旨報告していたが、すでに大戦果の上奏、大本営発表のあとで、全体の情勢判断に生かされなかった[25]。一

○月一三日の午後、海軍の鹿屋基地で堀参謀が見た光景は、次のようなものであった。

飛行場脇の大型ピスト〔指揮官・搭乗員の待機所〕の前は十数人の下士官や兵士〔台湾沖航空戦から帰還したパイロットたち〕が慌しく行き来して、大きな黒板の前に坐った司令官らしい将官を中心に、数人の幕僚たちに戦果を報告していた。

「○○機、空母〔戦艦?〕アリゾナ型撃沈!」／「よーし、ご苦労だった!」

戦果が直ちに黒板に書かれる。

「○○機、エンタープライズ轟沈!」／「やった! よし、ご苦労!」

また黒板に書き込まれる。

その間に入電がある。別の将校が紙片を読む。

「やった、やった、戦艦二撃沈、重巡一轟沈」

黒板の戦果は次々と膨らんでいく。

「わっ」という歓声が、そのたびごとにピストの内外に湧き上る。[26]

堀参謀は、この時、「誰がこの戦果を確認してきたのだ、誰がこれを審査しているのだ」[27]との疑問を強く感じたという。堀は回想の中で海軍のずさんな戦果判定を批判しているが、この航空戦に一部の部隊(新たに編成された雷撃部隊)が参加していた陸軍もまったく同様で、一〇月一六日の参謀本部戦争指導班『機密戦争日誌』には

昨日〔一五日〕陸軍第九十八戦隊(一五機)ノ攻撃ニ依リ左ノ戦果ヲ挙ケタリ、

空母三(大型一、小型二)戦艦一、巡洋艦二ヲ轟撃沈セリ、

陸軍雷撃機ノ初陣トシテ、此ノ赫々タル戦果ハ将ニ空前絶後ナリ[28]

と記されており、わずか一五機の出撃で空母を含む六隻を撃沈したとしているのであるから、陸軍も海軍の戦果判定の甘さを一方的に批判できるほどの審査能力をもっていたわけではなかった。

ともかく、大勝利確実という空気は、第一線部隊で醸成されたことは確かである。一〇月一四日に沖縄本島の小禄飛行場に進出した海軍の雷撃部隊の一隊員・世古孜(下士官)は、一二・一三日のT部隊の攻撃で「敵空母九隻ないし十四隻を撃沈」したとの噂ですでに基地は「戦勝気分に沸き返っていた」[29]と証言している。世古は、基地の整備員たちに「搭乗員、出かけて行っても、みんなが先に沈めて、もう沈める艦は、ありませんや」[30]と言われたという。

台湾沖の「大勝利」は、最前線のパイロットたちが恐怖の中で見た幻であった。攻撃隊パイロットや偵察員が見た夜間海面における無数の火柱は、実際には、米艦からの対空砲火によって撃墜された日本軍機が海面に激突した際の火炎であった。当時、海軍航空隊の搭乗員の技量は、全般的に相当低下しており、実戦経験も浅く、夜間に、しかも米艦からの猛烈な対空砲火をかいくぐりつつ、冷静に戦果の真偽を確認できる者がほとんどいなかったのである。

ただ、搭乗員の技量低下に起因する戦果の誇大報告は、大本営でも予想ができたはずである。現地部隊による戦果の誇大報告と、それを

信じたが為の失敗は一九四三年一一月の「ブーゲンビル島沖航空戦」などそれまでにも何度も例があったからである。当時、一隻の正規空母を沈めるのには艦上爆撃機（急降下爆撃機）の二五〇キロ爆弾四～五発と艦上攻撃機（雷撃機）の魚雷三～四発を命中させる必要があるとされていた。[31] 艦爆も艦攻もそれぞれ爆弾・魚雷は一発しか搭載していないのであるから、一隻の空母に七～九機の航空機が命中弾を浴びせなければならない。当時、爆弾・魚雷の平均命中率は三〇～四〇％とされていたから、仮に命中率を三五％とすれば七～九機が命中弾を得るためには二〇～二六機が目標に投弾しなければならない。だが、そもそも米艦隊の対空砲火や迎撃戦闘機の網をかいくぐって目標に投弾できるポイントに到達できる日本軍機は一〇％程度であると搭乗員たちも教えられていたのであるから、[32] 単純に計算しても、一隻の空母に二〇～二六機が投弾するためには、二〇〇～二六〇機が出撃する必要があることになり、一〇隻の空母を轟撃沈するには、出撃機数はのべ二〇〇〇～二六〇〇機を要することになる。一〇月一二日の段階で台湾・沖縄方面に集中可能な日本軍機は最大限に見積もっても約六〇〇機と判断されるので、それから計算すれば、一回の総攻撃で投弾可能なポイントに到達できたもの約六〇機、命中弾を得たもの二一機ということになり、命中ターゲットがすべて空母であったと仮定しても、約六〇〇機の総攻撃でも最大で三隻撃沈ということになる。実際には、集中し得た兵力と現実に艦艇を攻撃できる兵力には格差がある（兵力には爆撃・雷撃機能のない戦闘機などの機種も含まれている）し、一回出撃すれば、当時の損耗率は五〇～六〇％に達していたので、反復攻撃するたびに戦力は急激に低下していく。現に一六日の上奏文でも、精鋭のT部隊も最初の出撃で八〇機であったものが、翌日には三十数機しか出撃できなかったことが記されている。

つまり、実質二日間の航空戦で、日本軍が米空母一〇隻を撃沈するなどというのは、この戦域に集中された航空機が、戦闘機も含めて爆弾を積み、ほとんど無傷で反復攻撃を四～五回も加えなければ得られない戦果であり、まったく非現実的な数字であった。しかし、この段階における大本営の情報に対する分析・審査判定能力はきわめて低く、統計にもとづく戦果の推定計算よりも前線部隊からの報告を一方的に過信していたことは明らかであった。そのため天皇も、誇大な、あるいは架空の大戦果の報告を受けていたのである。

だが、それでは天皇が受けていた戦況上奏は主観的な判断にもとづく誤報ばかりで、天皇は戦争の実態を知らされていなかったのかと言えば、必ずしもそうではない。すでに上奏された情報（戦果）と明らかに相矛盾するものであっても、軍がつかんだ最新情報は天皇に報告されていたのである。その意味で、軍にとって都合の悪い情報を、意図的に隠すということはされていない。すでに大戦果が報告された一〇月一六日の同じ上奏文にも、早くも戦果とは大きく矛盾する米空母発見の報告がなされている。

尚索敵機ハ此ノ部隊ノ他ニ午前十一時過ギ「マニラ」ノ五五度六〇〇浬ニ航空母艦四 隻其ノ他数隻ヨリ成リマスル部隊ヲ認メ

テ居リマスガ其ノ後ノ状況ハ得テ居リマセヌ〔中略〕

今未明夜間索敵ヲ行ナッテ居リマシタ九〇一空ノ飛行艇ハ台湾東方三ケ所ニ亘リマシテ敵機動部隊ラシキモノヲ探知致シテ居リマスガ右ハ総テ敵損傷艦ノ算ガ大デ御座イマス　午前九時頃高雄ノ一一〇度二六〇浬ニ於キマシテ大型空母二隻戦艦二隻其ノ他二隻合計六隻ヨリ成リマスル一群ト其ノ東方近巨〔距〕離ニ戦艦二隻巡洋艦四隻駆逐艦数隻ヨリ成リマスル一群トヲ発見致シ更ニ午前十時半頃同ジク高雄ノ九五度四三〇浬ニ於キマシテ空母七隻戦艦七隻巡洋艦十数隻ヨリ成リマスル有力ナル一部隊ヲ発見致シテ居リマス(33)

ここだけでも、空母一三隻とそれ以外に「損傷艦」の存在が報じられている。同じ上奏文の中で、一方で空母一〇隻撃沈・六隻撃破を言い、他方で一三隻の存在を報じているのである。当時（一九四四年九月末）、米海軍は、正規空母一五隻・軽空母（巡洋艦改造）九隻の合計二六隻を保有しており、うち正規空母一隻をのぞく二五隻を対日作戦にあてていた。またこれらの艦隊空母とは別に商船を改造した護衛空母を七四隻保有していた（うち約四五隻を対日戦に投入と軍令部は判断していた）のであるから(34)、どれだけ空母が出現してもおかしくはないが、それにしても空母群を攻撃した海域と新たに出現した海域はあまりにも近すぎ、新手の空母群の出現とは考えにくい。

その後も、全滅させたはずの米空母を続々と発見したという索敵機からの報告が上奏されていることからも明らかなように、上奏を詳細に検討してみれば、以前の戦果報告との矛盾は明らかである。しかし、現存する戦況報告文書においては、戦果を大幅に正誤訂正をした例はない。台湾沖航空戦についても、「朕深ク之ヲ嘉尚ス」との勅語まで出してしまった以上、統帥部も天皇も引っ込みがつかなかったのである。

Ⅲ　フィリピン沖海戦における損害と「特攻隊」についての上奏

次に、損害の報告についてみてみよう。戦果の判定はとりわけ夜戦や薄暮・黎明戦ともなれば非常に難しい。だが、自軍の損害の判定の方は、艦艇や航空機が未帰還になるのであるから確実に把握できる。損害について天皇は正確な報告を受けていたのであろうか。

結論から言えば、大本営海軍部の一九四四（昭和十九）年一〇月から一一月にかけての戦況上奏を分析してみると、艦艇の損害についてはほぼ正確な報告がなされているといえる。たとえば、台湾沖航空戦後のフィリピン沖海戦で日本海軍は水上艦艇二八隻を失ったが（うち空母四、戦艦三）、天皇へは一〇月二三日から二八日までに艦名あるいは部隊名をあげて二〇隻の沈没、六隻の落伍・動静不明が報告されている。戦況上奏日とそこで報告された艦艇の動静については次の通りである。

上奏月日	沈没・落伍・戦場離脱艦艇名（　）内は上奏で示された原因
一〇月二三日	〈青葉〉航行不能（二三日被雷）、〈愛宕〉〈摩耶〉沈

没（二三日被雷）

一〇月二四日

〈高雄〉戦場離脱（二三日被雷）

一〇月二五日

〈武蔵〉沈没（二五日空襲）、〈妙高〉戦場離脱（二五日被雷）第二戦隊（〈山城〉〈扶桑〉〈満潮〉〈朝雲〉〈山雲〉〈時雨〉）沈没、〈最上〉大破炎上（二五日水上部隊と戦闘）、〈若葉〉沈没（二四日空襲）

一〇月二六日

〈鳥海〉〈筑摩〉〈熊野〉損傷（二五日水上部隊と戦闘）、〈鈴谷〉沈没（二六日）、〈鳥海〉〈筑摩〉〈野分〉〈藤波〉落伍・状況不明、〈最上〉沈没（二六日）、〈阿武隈〉戦場離脱、〈時雨〉生存確認帰投中（二五日に沈没と上奏）、〈秋月〉沈没・〈千歳〉〈多摩〉落伍（二五日空襲）、

一〇月二七日

〈沖波〉落伍、〈能代〉沈没（空襲）、〈阿武隈〉沈没、〈浦波〉〈鬼怒〉沈没（二六日空襲）、

一〇月二八日

〈瑞鶴〉〈瑞鳳〉〈千歳〉〈千代田〉〈秋月〉沈没・〈多摩〉損傷（二五日空襲）[35]

上奏では、同一の軍艦が重複して報告されている場合もある。例えば、〈最上〉は大破炎上から沈没へ、〈阿武隈〉は戦場離脱から沈没へ、〈千歳〉は落伍から沈没へ、〈鳥海〉〈筑摩〉は損傷から落伍・状況不明へ、〈多摩〉は落伍から損傷へ、逆にいったんは全部沈没とされていた第二戦隊のうち〈時雨〉は沈没から生存へと修正報告がなされている。また、〈秋月〉のように二度にわたって沈没が報告された例もある。なお、沈没とされた二〇隻は実際にも沈没しており、落伍・状況不明とされた〈鳥海〉〈筑摩〉〈野分〉〈藤波〉〈沖波〉の五隻、落伍から損傷とされた〈多摩〉の合計六隻も実際には沈没していた。実際には沈没したにもかかわらず、天皇への報告で言及されなかったのは〈初月〉〈早霜〉の駆逐艦二隻だけである。聯合艦隊司令部でも落伍したり通信不能になった艦艇の把握が充分出来なかったのが実情であるから、天皇への上奏は艦艇の損害の速報という点ではかなり正確だったといえるが、二五日に沈没していた第三艦隊本隊（囮となった小沢艦隊）の〈瑞鶴〉以下空母四隻の沈没報告が二八日になったのは遅きに失した感が否めない。

しかし、航空機の損害については、前述した台湾沖航空戦では一〇月一六日の上奏において「七四機未帰還」[36]と報告されているものの、実際には少なくとも一七四機が失われたにもかかわらず、一七日以降、レイテ方面の報告に紛れてしまい、あらためて集計報告がなされた形跡がない。概して、戦況上奏において航空機の損害状況は分かりにくい。台湾沖航空戦については、大本営公式発表の方が実情に近く、一九日に「三一二機未帰還」[37]と公表されている。もっとも、国民向けの

大本営発表は艦艇の損害については虚偽が多く、フィリピン沖海戦でも水上艦艇は六隻沈没（実際は二八隻）とされている。[38]

つまり、天皇は戦況上奏を聞いているかぎり、自軍の損害については、とりわけ水上艦艇の損害についてはかなり正確に把握できたはずである。しかし、あまりにも誇大な戦果報告がなされるので、損害の多さからくる衝撃も中和され、上奏を受けた時には敗北したとは感じなかったかもしれない。フィリピン沖海戦でも、聯合艦隊が空母四・戦艦三を含む二〇隻以上の水上艦艇と一〇〇機以上の航空機を失ったことは上奏から分かる（実際には二八隻沈没、二一五機喪失）。だが、同時に米海軍に空母八隻を含む水上艦艇二〇隻撃沈、航空機五〇〇機余撃墜の戦果をあげたと報告されているので（実際には六隻撃沈、一二五機撃墜）、天皇には完敗の戦闘であったとは感じられなかったかもしれない。参謀本部戦争指導班も一〇月二六日の日誌に

本日杉田大佐ヨリ比島状況報告アリテ、作戦ハ逐次好転シツヽアリ
GF［聯合艦隊］モ相当ノ損害ハ受ケタルモ敵トノ離脱ニ成功セリ[39]

などと記しており、東京ではレイテ決戦緒戦の決定的失敗はそれほど実感をもって受け止められていなかったといえる。

だが、このフィリピンをめぐる決戦の緒戦において天皇にとっても衝撃的であったのは特攻作戦の開始であった。一般に、「特攻第一号」は、一〇月二五日に、ルソン島マバラカット基地から飛び立ち、アメリカ護衛空母セント・ローに突入し撃沈した関行男大尉を指揮官とする第一神風特攻隊敷島隊の爆装零戦五機であるとされている。だが、これは、あくまでも顕著な戦果をあげた「第一号」ということであって、この日、関大尉らよりも早く四隊（計八機）が、関大尉らと同時刻に他に二隊（計五機）が出撃している。また、戦果は未確認ながら、組織的な航空特攻作戦の出撃・未帰還の第一号ということなると、一〇月二一日にセブ基地から出撃した、久納好孚中尉が指揮する第一神風特攻隊大和隊の爆装零戦二機といえる。実際、この本当の「特攻第一号」は、天皇にも上奏されていた。一〇月二二日の「戦況ニ関シ御説明資料」には、敵艦隊の動静を記した後に、これらの「部隊ニ対シテハ第一航空艦隊特攻隊ガ［一〇月二一日］一四三〇発進攻撃ニ向ヘル模様ナルモ詳細不明ナリ」[40]とされている。この日の上奏では、「特攻隊」については文面上はこれ以上の説明がない。特攻について具体的な説明は、初戦果があがった翌日の二六日の上奏の際に行われている。

神風特攻隊ハ［一〇月二五日］午前六時三十分「ダバオ」ヲ発進「スリガオ」東方四〇浬附近ニ置キマシテ正規空母一隻ヲ撃破致シテ居リマス

午前十時四十五分「クラーク」ヲ発進致シマシタ敷島隊（神風特攻隊）ハ「スルアン」ノ北東三十浬附近ニ於キマシテ中型空母四隻ヲ捕捉之ニ突撃致シマシテ空母一隻ニ二機命中シテ轟沈セシメ他ノ空母一隻ニ一機命中シテ之ヲ火災停止セシメ軽巡一隻ニ一

機命中之ヲ轟沈セシメテ居リマス[41]

後段に記されている「敷島隊」が、一般に「特攻第一号」とされる関大尉が指揮する部隊であるが、天皇への上奏では、明らかにその前に他の部隊が「正規空母一隻ヲ撃破」していることを報告している。つまり、天皇に対しては、一〇月二一日から特攻が実施されていること、関大尉よりも前に出撃した部隊、戦果があった部隊があることを示している。一〇月二六日の上奏後、天皇は「そのようにまでせねばならなかったか、しかしよくやった」と及川古志郎軍令部総長に語ったとされている。[42] しかし、天皇が、この特異な作戦にショックをうけ、何らかの説明をもとめたのは確かである。海軍部では天皇に納得をえるため、「神風特攻隊御説明資料」を作成し、二八日に提出している。

神風特攻隊御説明資料（昭和一九―一〇―二八）

神風特攻隊ハ現戦局打開ノ為在比島海軍航空部隊ヲ以テ編成致シマシタ特別攻撃隊デ御座イマス　本攻撃隊ハ計画的ニ敵航空母艦ニ体当リヲ敢行シ其ノ機能ヲ封殺スルノヲ目的ト致シテ居リマシテ其ノ編制ハ二五〇瓩爆弾装備ノ戦闘機二～三機ヲ以テ攻撃隊トシ之ニ略同数ノ戦闘機ヲ直掩隊トシテ附シ掩護竝ニ戦果確認ヲ実施セシメテ居リマス

攻撃ノ成果中今日迄判明致シマシタモノハ二五日一二〇〇頃「スルアン」島ノ三〇度三〇浬ニ於キマシテ航空母艦四隻ヲ基幹トスル敵機動部隊ヲ攻撃隊四機ヲ以テ攻撃、航空母艦一隻ニ対シマシテ二機命中致シマシテ轟沈セシメ他ノ母艦一隻ニ対シマシテ一機命中之ニ火災ヲ生ゼシメ停止セシメマスト共ニ巡洋艦一隻ニ対シ一機命中之ヲ轟沈セシメテ居リマス

同日午前他ノ一隊ハ「スリガオ」東方四〇浬ノ敵機動部隊ヲ攻撃致シマシテ正規空母一隻ヲ撃破致シテ居リマス

二十六日ニハ二隊攻撃ヲ実施シ一隊（攻撃機三機）ハ午後「スリガオ」東方八〇浬ニ於テ敵航空母艦四隻ヲ攻撃、航空母艦一隻ニ二機命中全艦猛火ニ包マレ確実ニ之ヲ撃沈致シマシテ他ノ一隻ハ艦橋至近ニ突入之ニ相当ノ損害ヲ与ヘテ居リマス

右ノ一隊ハ全機未帰還ニテ情況不明デ御座イマス　右ヲ含ミマシテ二十七日迄ニ攻撃ヲ実施致シマシタモノ六隊、二十七日攻撃ヲ実施中ノモノ五隊アリマスガ戦果ハ右ノ外判明致シテ居リマセン

本特攻隊ガ帝国海軍従来ノ特別攻撃隊マタハ決死隊ト異ナリマス点ハ計画的ニ敵艦ニ突入致シマス関係上生還ノ算絶無ナル点デ御座イマス

本計画ハ最初第一航空艦隊ノ戦闘機ノミニテ編成致シテ居リマシタガ現在デハ各隊各機種ニ及ボシツツアル模様デ御座イマス[43]

上奏文にある「計画的ニ敵艦ニ突入致シマス関係上生還ノ算絶無」という一節は、実に衝撃的である。また、最後の部分の「模様デ御座イマス」という表現は、この作戦を実施したのがあくまでも第一線部隊であり、大本営が命じたのではないという責任逃れ的なニュアンスを感じさせる。

おわりに——本稿の結論——

一九四四年一〇月の台湾沖航空戦・フィリピン沖海戦を事例として戦況上奏の質と大本営の情報収集・分析能力について検討してきた。

天皇に上奏された戦果は、その多くが大本営自体の戦果判定能力の低さから客観的には誤りであったが、大本営が認定した、すくなくともそう信じた戦果であった。大本営は主観的には、あくまでも自分たちがつかみ得た「事実」を天皇に伝えていたのであるが、その戦果判定の方法は、統計にもとづく戦果推定よりも、第一線部隊からの矛盾に満ちた、あまりに過大な報告を適宜セレクトするというやり方がとられていた。

ただし、戦果判定と矛盾するものであっても、索敵・偵察結果は天皇に伝えられていた。そのことは、大戦果を報告した一〇月一六日の同じ上奏文のなかで、台湾近海で索敵機が合計一三隻にもおよぶ米空母を「発見」したとの報が、そのまま天皇に報告されていることからも分かる。大本営海軍部にとっては、空母一〇隻撃沈の大戦果も空母発見の報も第一線部隊からの報告にもとづく「事実」であり、それをそのまま天皇に伝えていたのである。

一方、日本軍みずからの損害についての天皇への報告は、かなり正確だったといえる。たとえば、一九四四年一〇月下旬、フィリピン沖海戦で日本海軍は大敗し、戦艦武蔵など二八隻の水上艦艇を失ったが、戦況上奏において一〇月二三日から二八日のあいだに、部隊名あるいは艦名をあげて二〇隻の沈没と六隻の落後・動静不明が天皇に報告されている。実際に沈没したが、天皇に報告されなかったのは駆逐艦二隻のみである。損害の速報としては、正確なものだったといってよい。また、特攻隊についても、戦果があがっていない段階から報告されていることは注目すべきである。

以上のように、大本営海軍部『奏上書綴』にある戦況上奏の書類をみるかぎり、戦果に関しては軍自体の情報収集能力の不足、判定方法の未確立から客観的には誤った過大な数字が天皇には伝えられていたが、少なくとも軍がみずからも「事実」と認定した戦果と情報が上奏されていたのである。また、自軍の損害に関する限り、かなり実態に近いことが報告されていたことがわかる。また、かならずしも軍にとって都合の悪いことが全て隠されたり、意図的に捏造された虚報ばかりが天皇に報告されていたわけではないことも確かである。なお、戦況上奏は、陸軍と海軍が同じような形式で、別々に毎日行っていたが、陸軍については残念ながら奏上書などの資料の現物は見つかっていない。したがって、天皇のもとに集中していた軍事情報の全貌を明らかにすることはできないが、天皇は陸軍と海軍から重要かつ詳細な軍事情報をほぼリアルタイムで得ており、しかもその内容も簡略なものではなかったことは確かである。

注

（1）「戦況ニ関シ御説明資料　昭和十九年十月十五日」、大本営海軍部『昭和十九年十月奏上書』（防衛庁防衛研究所図書館所）所収。以下、この『奏上書』級におさめられている該当する月日の戦況上奏から引用する。

（2）天皇と情報について検討した著作としては、藤原彰・吉田裕・伊藤悟・功刀俊洋『天皇の昭和史』（新日本新書、一九八四年）、藤原彰『昭和天皇の十五年戦争』（青木書店、一九九一年）、拙著『昭和天皇の戦争指導』（昭和出版、一九九〇年）、拙著『大元帥・昭和天皇』（新日本出版社、一九九四年）、拙著『昭和天皇の軍事思想と戦略』（校倉書房、二〇〇二年）などがある。

（3）台湾沖航空戦そのものについては、神野正美『台湾沖航空戦――T攻撃部隊　陸海軍雷撃隊の死闘――』（光人社、二〇〇四年）によってその戦闘の全貌がほぼ明らかにされている。

（4）前掲『昭和十九年十月奏上書』。

（5）実松譲『米内光政秘書官の回想』（光人社、一九八九年）三六〇頁。

（6）防衛庁防衛研修所戦史室・戦史叢書45『大本営海軍部・聯合艦隊（6）』（朝雲新聞社、一九七一年）四三六～四三七頁。

（7）Samuel Eliot Morison, *LEYTE June 1944-January 1945, Volume XII of History of United States Naval Operations in World War II* (Little, Brown and Company, Boston, 1984), p. 90.

（8）及川古志郎軍令部総長「戦況ニ関シ奏上　昭和十九年十月十一日」、前掲『昭和十九年十月奏上書』所収。

（9）及川古志郎軍令部総長「戦況ニ関シ奏上　昭和十九年十月十二日」、前掲『昭和十九年十月奏上書』所収。

（10）及川古志郎軍令部総長「戦況ニ関シ奏上　昭和十九年十月十三日」、前掲『昭和十九年十月奏上書』所収。

（11）同前。

（12）及川古志郎軍令部総長「戦況ニ関シ奏上　昭和十九年十月十六日」別表、前掲『昭和十九年十月奏上書』所収。

（13）前掲『大本営海軍部・聯合艦隊（6）』四四六頁。

（14）木戸幸一『木戸幸一日記』下（東京大学出版会、一九六六年）一一四八頁。

（15）前掲『大本営海軍部・聯合艦隊（6）』四四七頁。

（16）同前、四九六頁。

（17）米国海軍省戦史部編纂・史料調査会訳編『第二次大戦米国海軍作戦年誌　一九三九―一九四五年』（出版協同社、一九五六年）一八三～一八四頁。

（18）第二復員局残務処理部資料課『台湾沖航空戦竝関連電報綴（昭和十九年十月十日～二十日）』（防衛庁防衛研究所図書館所蔵）より算定。

（19）「T部隊指揮官発　十月十四日一七四八受　電報」、同前『電報綴』所収。

（20）「聯合艦隊司令部発　十月十五日〇〇五五受　電報」、同前『電報綴』所収。

（21）「高雄航空基地発　十月十三日〇四〇五受　電報」、「T部隊戦闘概報第二号　十月十四日一四〇〇受　電報綴』所収。

（22）軍事史学会編『大本営陸軍部戦争指導班・機密戦争日誌』下（錦正社、一九九八年）五九四～五九五頁。ここで言う「制式」とは、他艦種からの改造でない正規空母のことを指しているものと思われる。

（23）前掲「T部隊戦闘概報第二号　十月十四日一四〇〇受　電報」、前掲『電報綴』所収。

（24）前掲「戦況ニ関シ奏上　昭和十九年十月十六日」。

（25）堀栄三『大本営参謀の情報戦記――情報なき国家の悲劇――』（文藝春秋、一九八九年）一三六～一三八頁。

（26）同前、一三六～一三七頁。

（27）同前、一三八頁。

（28）前掲『大本営陸軍部戦争指導班・機密戦争日誌』下、五九五頁。

(29) 世古孜『雷撃のつばさ――海軍下士官空戦記――』(光人社NF文庫、一九九七年) 九五頁。
(30) 同前。
(31) 同前、九六頁。
(32) 同前。
(33) 前掲「戦況ニ関シ奏上　昭和十九年十月十六日」。
(34) 前掲『大本営海軍部・聯合艦隊(6)』一三八～一四二頁。
(35) 前掲『昭和十九年十月奏上書』所収の「戦況ニ関シ奏上」「戦況ニ関シ御説明資料」より作成。
(36) 前掲「戦況ニ関シ奏上　昭和十九年十月十六日」。
(37) 富永謙吾『大本営発表にみる太平洋戦争の記録』(自由国民社、一九七〇年) 一九一頁。
(38) 同前、二〇〇頁。
(39) 前掲『大本営陸軍部戦争指導班・機密戦争日誌』下、五九九頁。
(40) 「戦況ニ関シ御説明資料　昭和十九年十月二十二日」、前掲『昭和十九年十月奏上書』所収。
(41) 及川古志郎軍令部総長「戦況ニ関シ奏上　昭和十九年十月二十六日」、前掲『昭和十九年十月奏上書』所収。
(42) 猪口力平・中島正『神風特別攻撃隊』(河出書房、一九六七年) 一一一～一一二頁。
(43) 「神風特攻隊御説明資料　昭和十九年十月二十八日」、前掲『昭和十九年十月奏上書』所収。

Military Information and the Emperor Hirohito (*Showa Ten-no*) as Supreme Commander of the Japanese Forces:

Military Information Reports to Hirohito from Imperial General Headquarters (*Dai Hon'ei*)

YAMADA Akira

Referring to the examples of an air battle off the Taiwan coast and the Leyte naval battle in the Philippines that took place in October 1944, the author's examination of the Japanese Imperial headquarters' grasp of the war situation and the headquarters' report to the Emperor has revealed the following: The Imperial headquarters' method of judging the war situation was not speculation by statistics but the differential selection of overly optimistic reports from the battle front, which was full of contradictions. Consequently, reports of the war situation to the emperor were not objective and were sometimes wrong. However, the reports were based on what the Imperial headquarters had actually learned.

On the other hand, reports to the emperor concerning the damages the Japanese Imperial army and navy had suffered were pretty accurate. For example, the Japanese Imperial navy lost twenty-eight ships, including the giant battleship *Musashi,* in the late October 1944. Between October 23 and 28, the emperor received the reports that twenty ships sunk and six were missing or unknown, with mention of the actual names of troops and ships. The emperor did not learn two sunken destroyers. This indicates that quick reports of damage were relatively accurately conveyed to the emperor. In addition, the emperor started to receive reports of suicide attacks in the very early stage when suicide attacks were not successful. This is important because suicide attacks in this early stage were not known to public even after the World War II.

Keywords: Showa emperor; military information; reports of war situations; air battle off the Taiwan coast; Leyte naval battle